

大学間の中間活動体である教学比較IRコモンズでは、2015年からコモンズ参加大学において共通のウェブ・サーベイを用いた学修行動比較調査を実施しています。その結果は参加各大学において個別に詳細な分析がおこなわれると共に、参加大学内で適宜有用性を判断しつつ比較分析・検討が施されています。ここでは調査実施母体である教学比較IRコモンズとして、個別大学に拠らず、回答した全学生を総計した結果の一端について公開します。現に学んでいる学生たちの自らの学修に関する直近の生の反応の集約結果をご覧ください。

今回は4年目の調査で、参加大学は16大学、1万5千名ほどの大学生たちが寄せた回答結果から、またいくつもの発見と確認ができました。なお、その他の結果や情報についてはコモンズのwebページ（Google検索などで「教学比較IR」と）をご覧ください。

この枠内と右に示した結果は2018年に実施したALCS調査全体のデータ諸元です。

実査期間（全体） 2018年10月～19年2月

調査実施方法 ALCS独自のスマート・ウェブ・サーベイ

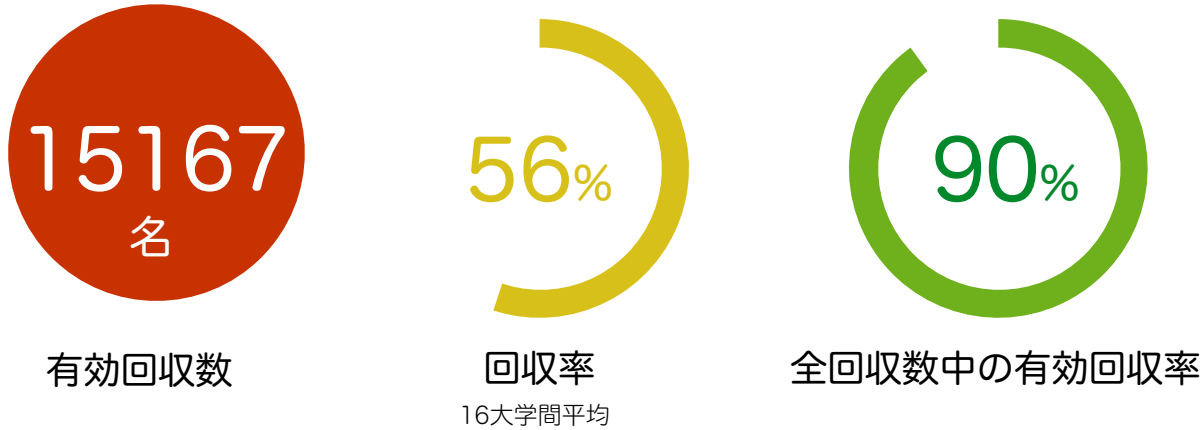
調査大学数 16

回収数 16832

有効回収とは設問本体80問について回答率が60%以上であった回答

回答者学年構成 1年生60% 3年生40% 1、3年生間での比率

性別構成 男性36% 女性64%



この調査は1、3年生を調査対象にすることを基本にしていますが、大学によっては別の学年でも実施しています。

参加大学（名称の50音順）岡山大学 お茶の水女子大学 嘉悦大学 川崎医科大学 共立女子大学 津田塾大学 帝京大学 田園調布学園大学 東京女子大学 長崎県立大学 奈良女子大学 日本女子大学 フェリス女学院大学 宮城大学 明星大学 横浜商科大学

経験 大学の授業や学びに関する経験

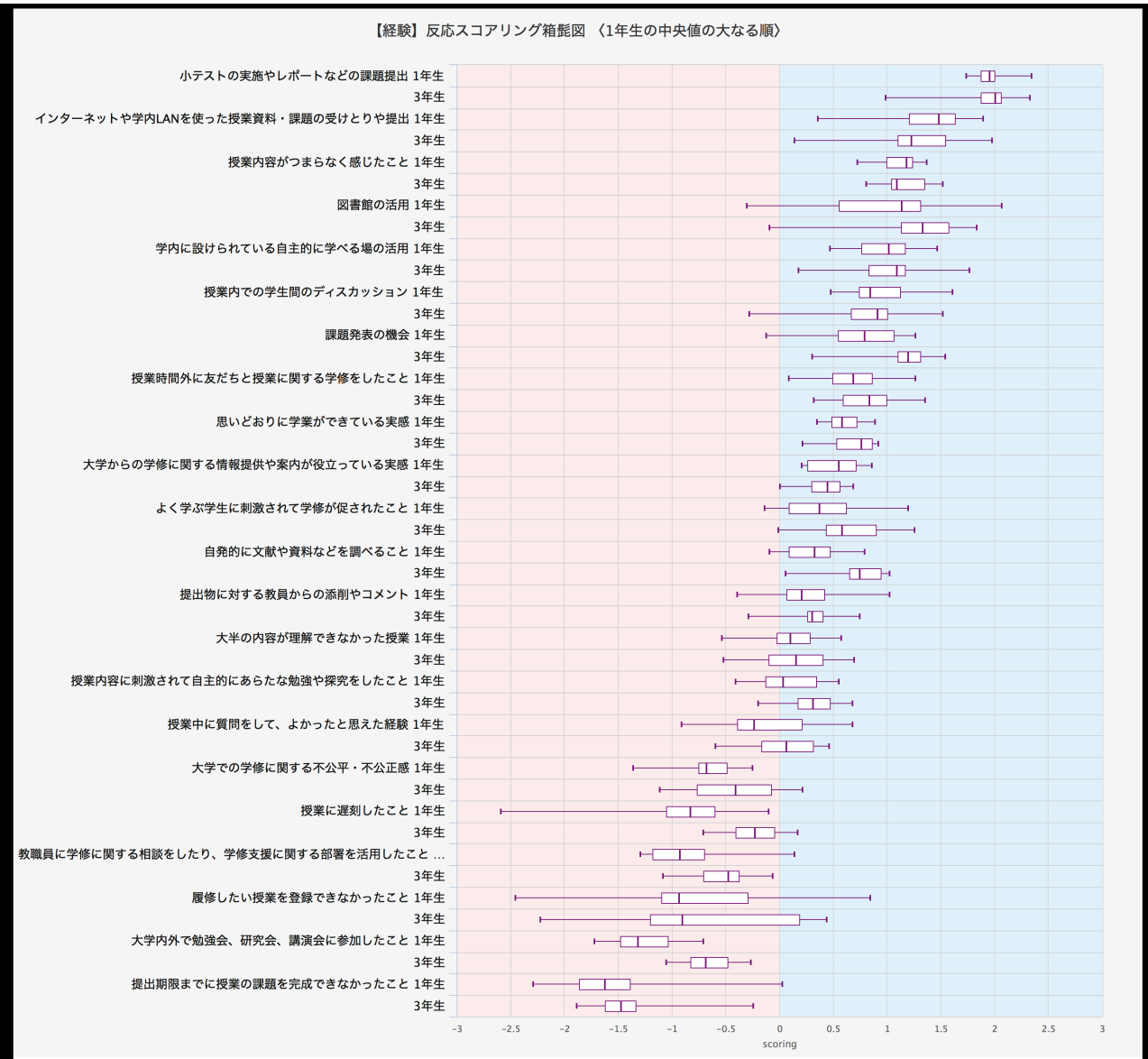
以下4つの設問カテゴリーの箱ひげ図は調査参加16大学の1・3年生の各設問スコアリング・データ*の平均値を並べ、その1年生の中央値が大なる順に並べたものです。箱内部の縦線が中央値、箱の左右辺が四分位値、ひげ両端が最大値、最小値です。

「経験」群については他の設問群に比してひげや箱の伸張が大きいことがわかります。学修関連の経験の多寡は大学間差異が比較的大きいことがわかります。

一般に2年間の修学経験差があれば、相応の学年間差異が生じてしかるべきですが、それがそのように現れているものもあればそうでないものもあることがわかります。その差異の読み取りにあたっては検定を要しますが、箱ひげ図上の目視で明白な差異を推測するには、学年間で両箱の全体がずれていて重なりがないケースに着目できます。するとこの場合は5設問が該当していることがわかります。

なお、この設問群には否定的な方向への回答が好ましい回答になるものも含まれています。ご注意ください。

* スコアリングデータの取り方については教学比較IRコモンズのウェブ・ページをご参照ください。



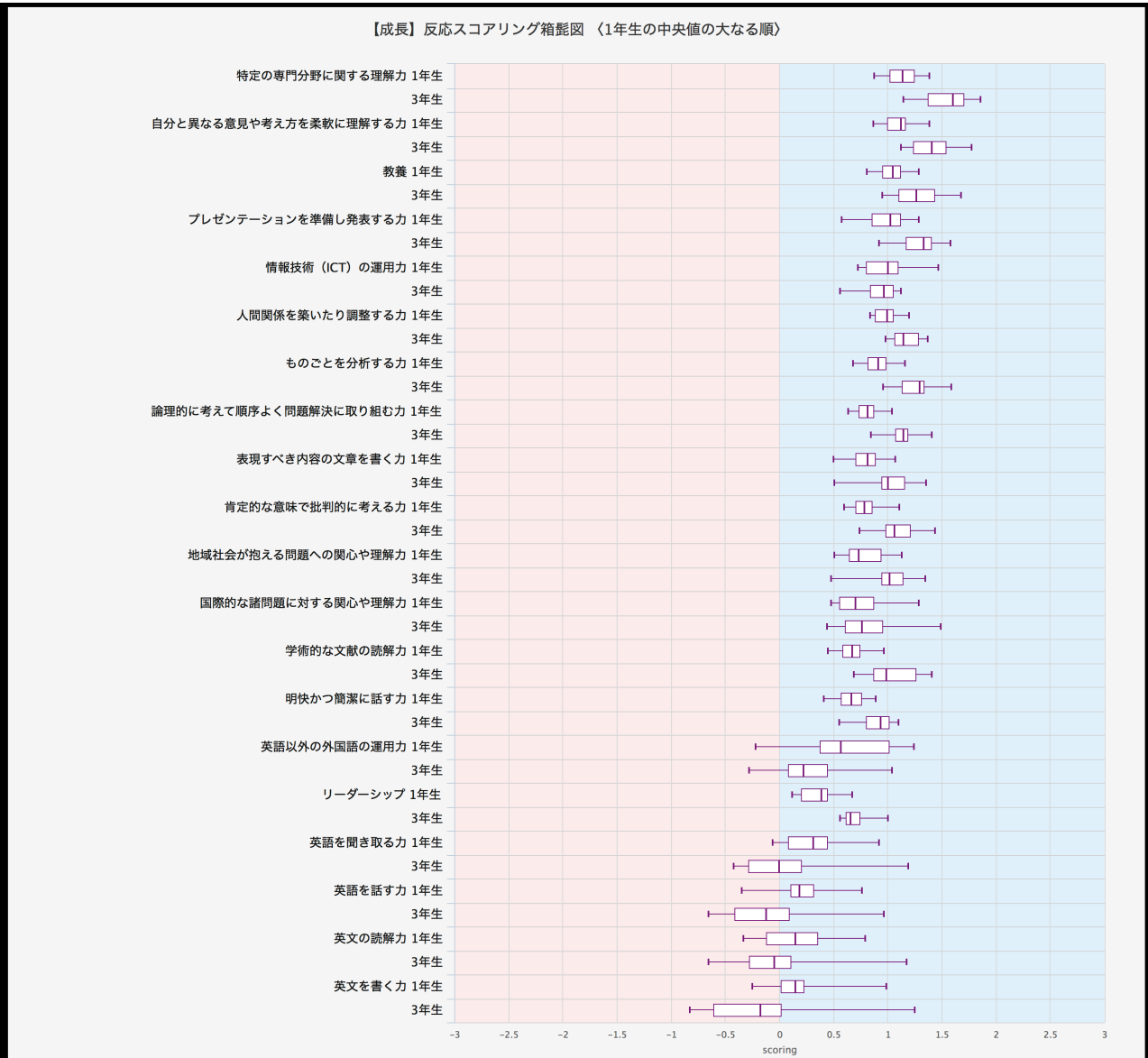
成長 入学時からの成長感

全体にひげが肯定域にあり、1年次秋においてすでに入学来の成長感が表明されています。20中12項では2年間の修学による成長感がはっきりとあらわれています。

多様な大学での調査にもかかわらず成長感については、ほとんどの項において大学間の差異がそれほど大きく生じていません。成長感の多くには大学の教育内容とはあまり関係なく、青年期の自然な発達に対する自覚が映し出されているのかもしれません。

例年のことながら、こうした全体の傾性に反して「成長感」で3年生において衰えを示した設問が認められました。それらはいずれも外国語、英語に関する力でした。これらは右ひげがとりわけ長く、最大値ないし上位評価において他の大方の大学と異質な大学があることもわかります。

この明らかな異質性は年度を変えても安定的にあらわれています。その事実を踏まえると、そうした稀な大学の秘密に迫ることは他の大学にとって共通の関心事であるといえましょう。



時間

日あたり、または週あたり平均値

大学生が学びやアルバイトに費やしている時間数は何かと注目されています。しかし、とりわけ学びの時間については週あたりで尋ねるか、日あたりで尋ねるか、その妥当性については曖昧なままでした。ALCSでは過去4年にわたり、両方の尋ね方を用意し、回答者の好みによってどちらかでの回答を得てきました。その結果、一般に、日あたりでの回答結果を7倍すると週あたり回答よりもはっきりと大きくなることがわかりました。つまり、日あたりという回答には1週のうちで学びをしている日における時間数が想定されていることがみえてきたのです。これはちょうど一日8時間労働ということが週に56時間の労働を意味していないことと同様です。また、週に40時間の労働ということが1日に5時間42分しか労働していない、とみることがおかしいことにもたとえられます。

それでは学生が事実上（授業外）に学びをしている日数は週に何日くらいなのでしょう。それは、週あたり回答者群の回答時間数平均値 = Days × 日あたり回答者群の回答時間数平均値 という仮定を立てることで、各大学および設問ごとにそのDaysを求めることで推定することができます。二様の尋ね方をする

ことで、この週あたりの（授業外）学び日数の推定とその大学間比較が可能になります。

これまでALCSでは、とりあえず一律1週を5日とみなして二様の尋ね方をした時間設問の結果を統合的に算定していました。しかし、本年度からはその換算はせず、日（週）あたりでみるときは単純に日（週）あたりでの回答結果でみることにしました。よってここに示した今年度の時間数結果は前年度までの梗概の値と直接比較することはできません。

なお、アルバイト従事時間については今回から週あたりでのみ回答を得ています。そのため日あたり回答が含まれていた前年度より数値が短くなっています。

授業外学修時間



授業に関連しない学習時間



アルバイトなどの就労時間



満足

教学に関わる満足度

ほぼ全項で各大学の平均値が肯定域に入ったことと、設問間の相対差異があまりないことから「総じて満足」という無難な学生生活の日常が映し出されているようです。今年度はそれを端的に裏付けるものとして総合的にみた大学の教育に対する満足感を直接尋ねています。結果は見事に他項を代表する結果という位置づけに落ち着き、学年間差異も明白には生じませんでした。

これを自然に受け止めれば、種々の大学改革施策を含めた取り組みは、どの大学でも共通してほぼ学生に肯定的に受容されているとみることができでしょう。

学年間差異として実験、実習室、ネットワーク等のファシリティには使用経験が増すほど満足感が低下するというごく一般的な回答が得られています。問題は例年変わらず「事務スタッフの応対」への回答が、大方の大学で共通して3年生で顕著に満足感を落していることでしょう。これは初年次における対応が厚いことによる相対的な反応と解釈できるかもしれませんが、これだけ明白に大きな差異としてあらわれてくると、その原因に少し踏み込んでみる必要があるといえそうです。



希望

在学中に望むこと

3年生の場合、回答時点での残りの大学生活は1年あまりで、それも大方は就活に勤しむ期間です。だから、入学初年次に比して在学中への望みは全般に低下します。そうしたなかで明白な低下が現れた項目が3～4項に留まったのはむしろ意外といえるかもしれません。

例年のことですが、少なくともこのように多様な大学の総合された回答をみるかぎり、今の時代らしく、海外留学や起業意識の涵養、あるいは能動学習の典型ともいえるチーム学習などに対する学生の希望は、大学側の思いほど強くはないこと、その一方でまるで昭和の時代の大学を思わせるような幅広い知識や教養、あるいは専門知を十分に学ぶことに、最も強い望みをもって大学生活を送っている様子がみえてきます。

大学はあまり目新しいものを追わず、もっと泰然として自分たちに最も相応しい範囲のオーセンティックなことに力を尽くすことが学生の求めとも合致することになるのではないか、と思わせる結果です。

